

しおり 文学の葉

第26号

2019年10月1日発行

Kitakyushu Literature Museum News

言葉の力、文学の力

館長 今川 英子

二〇一九年アカデミー賞作品賞他を受賞したアメリカ合衆国映画「グリーンブック」は、人種差別が色濃く残る一九六〇年代のアメリカ南部を舞台に、黒人天才ピアニストとイタリア系白人運転手の二人がコンサートの旅を続ける物語です。印象に残った一つは、教養に欠ける運転手が、旅先から妻宛てに懸命に綴る稚拙なラブレターに、気高い雰囲気をもとう知性溢れるピアニストが助言をすることで、書くほどに心揺さぶる手紙となり、帰りを待つ妻を感動させるというエピソードでした。言葉による表現が、人を動かす無限の力を有することを示す例は枚挙にいとまがありません。言葉の力、文学の力とはそういうものだと思います。

ところで二〇二二年度から、高校の国語科目が再編され、高校二、三年生の選択科目が、現行の「国語表現」「現代文」「古典」から、「国語表現」「論理国語」「文学国語」「古典探究」になります。「現代文」が「論理国語」と「文学国語」に分かれるのです。それは新指導要領によるもので、大学入試も二〇二〇年度から「大学入試センター試験」から、「大学入学共通テスト」となり、マーク式だけでなく、記述式や実用文の資料読解などが加えられる予定です。試行調査では、高校の生徒会規約を読み解き記述式で答える例題や著作権法などが出題されま

した。そのために多くの高校では、「文学国語」ではなく「論理国語」を選択し、その結果、文学がますます読まれなくなるのではと、日本文藝家協会や日本近代文学会を含む多くの学会からは、そうした状況を危惧する声明が出されています。

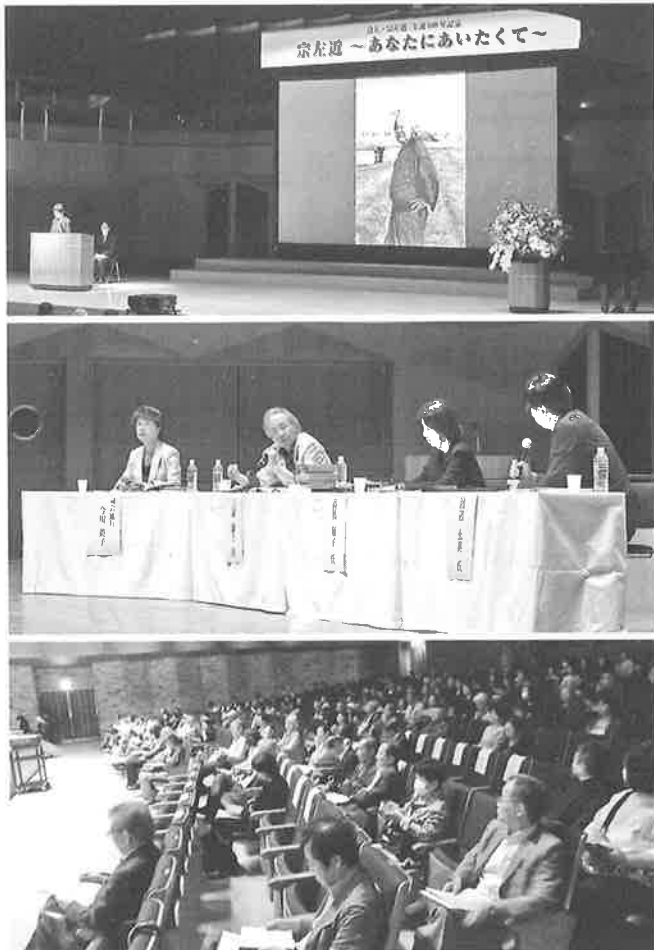
十年余り、国語教師として高校の教壇に立ちましたが、「山月記」「こころ」「舞姫」「高瀬舟」「羅生門」等々の教材は殊に楽しみで、生徒とともにさまざまな読みを展開し、私も一緒に、人が生きるといふことの根幹の問いを模索できた時空間だったと振り返ります。

一義的でなければならぬ実用文の読解力を高めることは勿論必要です。「読み、書き、そろばん」の基本的次元で身につけなければなりません。それに比し、多様な読みを内包する小説や詩歌、評論は、実用文読解以前の問題意識、批判精神を涵養し、のっぺらぼうな人間を作らないためにも大切な教材であると考えています。当館はこの九月から展示リニューアルの工事に入りました。再オープンは来年三月末の予定です。ゆかりの作家たちの文学作品とその言語表現の豊かさを伝えていく展示でありたいと、目下、職員一同準備に動いております。

しばらくご迷惑をおかけいたしますが、どうぞリニューアルを楽しみにお待ちください。

目次

○ 言葉の力、文学の力	1	○ 小倉祇園太鼓四〇〇周年行事歴史展 四百年の鼓動	6
○ 詩人・宗左近 生誕100年記念イベント	2	○ 共催 第16回 北九州市書道連盟代表作家展	
宗左近～あなたにあいたくて～		【新元号記念 万葉集を書く】	
○ 宗左近ゆかりの地・顕彰活動紹介	3	○ 講座「村田喜代子の文学いろいろ」	
○ 合唱（混声合唱団 コール・フェスタ）		○ お祝い	
○ 富永裕輔さんミニコンサート		○ 森のささやきが聞こえますか 倉本聰の仕事と点描画展	7
○ 「詩人 宗左近 その生涯と作品」冊子制作		○ 倉本聰ギャラリートーク	
○ シンポジウム・宗左近の文学世界（抄）	4・5	○ 第26回瀬戸内文学館連絡協議会総会	8
		○ 令和元年度上半期「偲ぶ会」の紹介	
		○ お悔やみ	
		○ 文学館は展示改修のため一時休館中	
		○ 寄贈者・提供者、提供雑誌	



詩人・宗左近 生誕 100 年記念イベント



宗左近

~あなたにあいたくて~

鳥泳ぎ魚飛ぶなら
そこがどこでも響灘

遠賀川 速くの賀は

近くの悲しみですか

あの世とこの世 牧山峠

一本道 きみとおれ

帆柱山

ゆらり夕焼け
空の沖

2019 年 5 月 18 日 (土)

13:30 ~ 17:00 参加無料 (要申込)

会場：北九州市立響ホール
(北九州市八幡東区平野 1-1-1)

主催：北九州市立文学館

協力：宗左近・花の会 思潮社



宗左近
(1919 ~ 2006)

二〇一九年は北九州・戸畑生まれの詩人・宗左近の生誕一〇〇年の年です。それを記念して北九州市立響ホールにて、「宗左近—あなたにあいたくて」を開催しました。

一九一九年五月一日に生まれた宗左近は、旧制小倉中学校を卒業するまで、主に北九州で過ごしました。第三詩集『炎える母』で第六回藤村記念歴程賞を受賞し、詩人としての地歩を固めました。その後、ライフワークとなった全十八冊に及ぶ詩作群『縄文シリーズ』を刊行。一九九九年には、北九州で過ごした時代を背景に、九州の地名を多く詠んだ一行詩集『響灘』を刊行しました。他にも美術評論、翻訳を数多く手がけ、幅広い業績を残しました。

① 宗左近紹介DVDの上映(「宗左近ファンクラブ」(現「宗左近・花の会」)作成)

② 宗左近ゆかりの地(千葉県市川市、宮城県加美町(旧・中新田町))の顕彰活動の紹介。

③ 市川讃歌「透明の蕊しんの蕊」と、中新田町歌「瞳に愛を」(共に宗左近作詞)の合唱(混声合唱団コール)

フェスタ、ピアノ・楠本隆一)

④ 三浦雅士さん(文芸評論家)、高橋順子さん(詩人)、渡辺玄英さん(詩人)によるシンポジウム「宗左近の文学世界」(司会：今川英子文学館長)

⑤ 宗左近の詩を使った楽曲「響灘—Les Misérables」を制作したシンガーソングライター富永裕輔さんのミニコンサート。
シンポジウムあり、コンサートあり、さまざまな角度から宗左近に触れることのできる大変充実したイベントとなりました。次頁からはその内容をご紹介します。

アンケート

・合唱、シンポジウム、ミニコンサート、どれも期待以上のものだった。宗左近さんのことをよく理解できた。

・市川市や宮城県など遠方からも来られていて感激した。

・宗左近作品の文学的価値について、また、美術評論について、じっくりお話をきく機会があると嬉しく思う。今日は、宗左近に深く会えた気がした。

・シンポジウムの登壇者の皆様のお話が大変興味深く、また、市民として嬉しく拝聴した。北九州・戸畑の生んだ詩人として私たちの市民の誇りとして心に深く刻まれ、生き続けていくことを願っている。

宗左近ゆかりの地・ 顕彰活動紹介

宗左近ゆかりの地での顕彰活動について、宗左近の終の棲家となった千葉県市川市より、市川市文化振興課長の菊池淳郎さんと、顕彰団体「宗左近・蕊の会」の伊東美佐子さんに、市川市での宗左近の活動、顕彰活動についてお話をいただきました。菊池さんからは市川市文学ミュージアムの取組について、伊東さんは蕊の会会長の能村研三さんの文章を代読され、宗左近の市川での文化振興への尽力や、宗左近詩碑の建立経緯についてご紹介いただきました。

また、宗左近が深く愛し、繰り返し通った宮城県加美町（旧・中新田町）から、加美町商工観光課長の岩崎行輝さん、顕彰団体「中新田落鮎塾」の佐々木弘毅さんにお話をいただきました。岩崎さんは、当時の中新田町長の本間俊太郎氏が宗左近に町歌を依頼したこと、に始まる宗と町のつながり、宗左近記念縄文芸術館に設立について話され、佐々木さんは、宗左近と町の人びとの関わり、交流についてお話をいただきました。

宗左近が市川市、加美町に遺した功績は、今も大事に受け継がれています。北九州を含めた三つの町が、これから宗左近を顕彰するにあたり、協力してゆくきっかけになればと思います。



菊池淳郎さん



岩崎行輝さん



伊東美佐子さん



佐々木弘毅さん

合唱 （混声合唱団 コール・フェスタ）

宗左近は校歌や町歌など、合唱曲の作詞を数多く手がけました。特に作曲家の三善晃とは、深く理解し合い、多くの仕事をともにしました。市川讚歌「透明の蕊の蕊」、中新田町歌「瞳に愛を」も二人の作品です。今回はこの二曲を、北九州の混声合唱団「コール・フェスタ」の皆様にご歌っていただきました。指揮は松尾寿人さん、ピアノ伴奏は楠本隆一さんです。

宗左近ゆかりの地である市川市と加美町（旧・中新田町）の歌が、宗左近の生まれた北九州の合唱団の歌声でこの地に響き渡る、またとない一時となりました。



合唱の様子
（混声合唱団 コール・フェスタ）

富永裕輔さん ミニコンサート

本イベントのフィナーレは富永裕輔さんによるミニコンサートです。

富永さんは二〇〇七年、ファーストアルバム「すずなり」でプロデビューされ、二〇一一年には「ひまわりの花」でNHK北九州放送局開局80周年事業「きたきゆうのうた」大賞を受賞され、宗左近の詩を用いた楽曲「響灘（Les Misérables）」（アルバム『シルクロード』収録）を制作されました。今回は「響灘（Les Misérables）」、「ひまわりの花」と、アンコールで「MY BEST FRIEND」を歌っていただきました。会場の皆様も富永さんの歌声に酔いしれた、フィナーレにふさわしい時間となりました。



富永裕輔さん

「詩人宗左近 その生涯と作品」冊子制作

本イベントの開催に合わせて宗左近の生涯、作品についての冊子を作成しました。

全三二頁、読みやすい文章で宗左近について紹介しています。文学館、各区図書館、宗左近記念室など市内各所で無料配布していますので、宗左近の入門書として一読いただければと思います。



シンポジウム・宗左近の文学世界（抄）

三浦 雅士（文芸評論家）、高橋 順子（詩人）、渡辺 玄英（詩人）、今川 英子（司会）

【宗左近との出会い、印象】

今川 シンポジウムを始めます。宗左近さんは北九州市の戸畑に生まれ、旧制中学卒業までお住まいでした。まず、三浦さんと高橋さんの、宗さんとの出会いからお話いただければと思います。

高橋 私は、大学卒業後、青土社という小さな出版社に勤めていて、入社してすぐ「現代思想」の編集者をしていたのですが、そこでニヒリズムの特集をしたことがあります。社長の清水康雄さんは詩人で哲学者でもあったのですが、清水さんから原稿を依頼するように言われて、そのときに初めてお会いしたんです。宗さんは「清水さんが言うのなら、何でも書きます」とおっしゃった。仕事より人なんだなと思って感銘を受けたのを覚えています。

三浦 ぼくが直接会ったのは、一九六六年か、六七年かな。詩人というのはみんなそうですが、宗さんは宗さんですごく不気味な人です。謎がいっぱいある。ぼくは、宗左近に一番近いのは三島由紀夫なのではないかと思っています。三島由紀夫も、本当に不気味な人で、最後の死に方もそうですが、それに対する反発も含めて敏感に反応し

ていたのが宗さんです。宗さんの『月をまわって地球へ』（文藝春秋）という小説があります。この小説はひじょうに三島の的な世界で、三島の技巧的な部分を取っ払ったところで、本質的なことを書いている。その本質は何かと言うと、ニヒリズムです。それが同じなんです。詩人になって縄文を論じた三島由紀夫みたいなところが宗さんにはある。ひじょうに頭が切れて優秀で、ニヒリズムを抱えているということと、美に対して、ある種の感受性を持っているということ。自分がニヒリズムを超えて生きていくためには美しかないと考えたところが、二人はそっくりなんです。そういう因縁があるけど、三浦さんと宗さんは全く印象が違います。



高橋順子氏

三浦雅士氏

今川 三浦さんが宗さんの文学はニヒリズムだとおっしゃいましたが、高橋さんは、代表作「炎える母」をどう読まれますか。「炎える母」は、東京大空襲で母親を見殺しにしまったという、そのことが贖罪となって、その日から二十二年後にやっと形になるわけですが。

高橋 自己の胸に詰まっている苦しい、悲しいといった感情を表出できません、収まることもありますよね。宗さんは、二十二年間胸に重たいものを抱えていた。これはやはり、お母さんを死なせてしまったことによる自己処罰ですよね。ただ、宗さんはそれですっきりしたわけではない。「ないころ」という言い方が結構出てくるのですが、宗さん特有の言葉です。「ないころ」と言えば、宗左近というくらい。「ないころ」は、文字通り、心が無い、空洞だということです。三浦さんがおっしゃったように、宗さんはニヒリズムの人です。苛烈な体験によって、ニヒリズムが骨にしみ通っている。一方で、北九州市生まれの宗さんは、自らを愛の縄文人を滅ぼした知の弥生人の末裔であると任じているらしいのです。おそらく戦禍で母を死なせたことへの罪の意識が、弥生人のそれを自分

のものとするまでに至ったのだと思います。そして、縄文の死者たちの魂は宗さんの中で母をはじめとする戦争犠牲者たち、友だちも含めて、魂といっしょに一体化する。それがニヒリズムを超えた、宗左近の神ではないだろうかと言ったことがあります。宗さんの神というのは、自分を問う神です。宗さんの詩は、書くほどに問いが深まっていく詩です。

今川 渡辺さんは、宗さんとお会いになったことはないようですが、次の、若い世代から見ても作品をどう読まれますか。

渡辺 ぼくはもう若くはないのですが、戦争は知りません。ただ、祖父が戦犯だったということがあって、戦争に対して自覚的なほうではないかと思っっています。宗左近の詩の印象は、今日の空のようにどんよりと曇っていて、向こう側は見渡せない、だけど、何か存在感はあるという、そういうイメージです。ぼくは、明治三十六年に自死した藤村操を思い出しました。長い文章を書いているのですが、「万有の真相は唯だ一言にして悉す、曰く『不可解』、世の中というのは曰く不可解であると言って、最後、華嚴の滝に飛び込んでしまふ。宗左近はいわば自死を禁じられた藤村操。明治から続くこうした教養人のニヒルの系譜の影響下に、宗左近も入る気がします。藤村も宗さんと同じ一高出身です。

「中句」、「響灘」について

今川 「中句」というのは、一行詩で、俳句と似ているけれども、俳句ではない。宗さん自身は、俳句以前であって現代詩以前、そして両者の中間なので「中句」と名付けると言っています。

宗さんは、縄文に触発された詩集を十八冊出されています。戦中に亡くした友人たちの魂と縄文の死者たちの魂を重ねているのですが、あるとき「縄文人たちの声が聞こえなくなった」と。ところが、ふと俳句をやり始めたところ、再び死者たちの声が聞こえてきた、というのです。それは自分の言葉ではなくて、縄文人や死者たちの声として生まれてきたと述べている。

渡辺 「より代」と書いています。死んでいった縄文人、それから、十五年戦争で亡くなった人たち、そして当然、「炎える母」であるお母さんの魂のより代である、と。

三浦 ぼくに言わせれば、具体的な、生々しい体験でしかありえないので、従妹と母親、近しい友だちといった、具体的に自分が知っている死者、生の声なんです。あとは抽象ですよ。縄文人の声なんかじゃない。それまでは、なんでこんな観念的なことばっかり書くんだろうと思うくらい、読んでいても楽しくなかったのですが、平成に入って、観念的なものの濾過をへ

て、思想的に培ってきた縄文論だとか、それまで自分が書いてきた小説とかがだーっと融合して句ができてくるわけです。それがすごくいいと思う。それを全部、文学館で預かっているんですよ。

今川 そうです。ただ、金子兜太さんが一行詩を未完であるとあまり評価されていませんでした。「響灘」はもともとこの街のことを詠んだ作品なので、残念に思っていました。

高橋 そうそう、中新田（加美町）では俳句の公開選考会がありまして、金子兜太さんが「宗さんが作っている「中句（なかぐ）（なかぐ）」はなんで「中句（なかぐ）（なかぐ）」って言うんだらう。俳句でいいのにな」っておっしゃったことがあります。でも、「中句（ちゆうぐ）」って読むんですよね。俳句としては、中途半端だ、ということだったのではないのでしょうか。



今川英子



渡辺玄英氏

渡辺 俳句や短歌は定型ですよ。宗さんには、定型の意識というのがほとんどなかったんじゃないかと思うんですね。もっと武装解除して詩を書いている気がします。そこが専門の俳人歌人たちには、物足りない感じがしたのではないのでしょうか。それは逆に、宗さんが晩年に至って、定型から切れたところで言葉を扱おうという戦略があったのかなとも思いました。

高橋 「響灘」は本当にいいと思います。北九州の皆さんは、「響灘」を一冊、宗さんが贈ってくれたんだと思われたいいのです。今日、ファンクラブの方に案内してもらって響灘を見てください。もやっついて何も見えないんですけど、若松のほうに行くと、響灘の水を見たら、宗さんに会った気がした。宗さんについて悲しい気持ちになったのは、初めてかもしれません。

三浦 これ一冊あればいいんですよ。独立した一冊として読むのもいいけれど、宗左近の人生を参照しながら読むと、また違った深みに入っていける。宗さんの詩の研究も、そろそろ始まってもいい。そうした場合に、深いところに行ける気がします。

今川 それはうれしいです。当館発行の文学館文庫に『響灘』を収めていますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。また宗さんの詩を読む研究会も地元で立ち上がりました。

三浦 「響灘」は本当に素晴らしいのですが、これを読むときに、読んでほしいのは「わが内なる幻妖序章・日本美の発見」（文化出版局）です。この本は完全に私小説で、先ほどから話題になっているようなことが響くんです。北九州……八幡なら八幡、小倉なら小倉、地名をもったその場所と響き合うというか、宗左近の中にそれがどんなふうに響いているのか仕組みがともよくわかって切ない。これは、すごくいい本なので、復刻されるといいと思います。

その他に新潮選書になっている何冊か。最後の『私の死生観』もいと思うけど、詩人として、俳人として、何人としていうのでなくて、宗左近という生身の存在自体がものすごく面白い言語現象としてあった、言語のひとつの渦を巻いている存在として、宗左近という人間がいたんだということが、ひじょうに腑に落ちる。そこから遡って、火野葦平や、意外に五木寛之も面白い、といった北九州の文学者の名前が出てくる。そのくらいの含みを持った感じで、この二冊を対にして読んでもらえると、すごくうれしく思います。

※本シンポジウムの詳細は「現代詩手帖」二〇一九年九月号に掲載されました。ぜひお手にとってご一読ください。

小倉祇園太鼓 四〇〇周年行事歴史展 四百年の鼓動

6月22日(土)～8月18日(日)

夏の小倉を彩る風物詩、小倉祇園太鼓は今年で四〇〇年を迎え、今年三月には「国重要無形民俗文化財」に指定されました。それを記念して、歴史展「四〇〇年の鼓動」を文学館にて、開催しました。

はじめに展示室外で、江戸時代から使用されていた小倉祇園の山車四基(県指定文化財)を展示。当館のステンドグラスの下に並ぶ姿は壮観でした。

展示室では、五つのコーナーに分けて、小倉祇園太鼓を紹介。「歴史」コーナーでは小倉祇園の起源から現在に至るまでの歴史を追い、「民俗」コーナーでは祭り半纏や、明治時代に神山を飾った切幕などを紹介。「用具コーナー」では太鼓やバチ、ジャンガラなどの祭りの用具を紹介。「芸態」コーナーでは、小倉祇園太鼓のリズム、打ち方を解説しました。「文学」コーナーでは岩下俊作『富島松五郎伝』(『無法松の一生』)を中心にゆかりの作家が描いた小倉祇園太鼓を、資料とともに紹介しました。

会場内では歴史紹介の映像、芸態についての講演会映像のほか、小倉祇園太鼓のVR映像や、太鼓の音を聞き当

てるクイズなど、楽しめる体験コーナーも設置。多くの皆さんに楽しんでいただけたようです。

今も小倉の人びとに愛されている小倉祇園太鼓。その歴史の重みに触れる展示会となりました。

展示点数約一二〇点

主催 北九州市(市民文化スポーツ局)

文化企画課文化財係



小倉祇園祭の山車4基



開会式の様子

共催 第16回北九州市書道連盟代表作家展 「新元号記念 万葉集を書く」

令和元年8月24日～9月1日

北九州市書道連盟による書道展が開催されました。「令和」最初の展示会となった今回は、『万葉集』を題材に代表作家たちによる作品およそ70点が展示されました。

新元号「令和」の典故となった『万葉集 巻第五』の「梅花歌卅二首并序(はいかのうたさんじゅうにしゅあわせてじよ)」の一節―「初春令月(しよしゅんのれいげつにして) 気淑風和(きよかくぜやわらぐ)―や、各々の作家が『万葉集』から選んだ歌などが書かれ、来場者は一点一点の書の作風を楽しんでいました。



講座「村田喜代子の文学いろいろ」

令和元年8月～令和2年2月

芥川賞作家・村田喜代子さんが毎月一冊の本とその周辺を語る文学講座(全7回)が開講しました。第一回目(8月24日)は、永井隆「長崎の鐘」を取りあげ、およそ70名が話に聞き入りました。第二回目以降の日程と作品は次のとおり。



第二回 9月21日(土)

星新一「おいでてこい」

第三回 10月19日(土)

葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」

第四回 11月23日(土)

星新一「終末の日」

第五回 12月7日(土)

アラン・ベネット「やんごとなき読者」

第六回 2020年1月25日(土)

松本清張「黒地の絵」

第七回 2月22日(土)

スベトラナー・アレクシエービッチ

「チエルノブイリの祈り」

※空席がある回は当日千円で受講いただけます。お電話でお問合せください。(093-571-11505)

【お祝い】

・村田喜代子さんが、『飛族』(文藝春秋)で第55回谷崎潤一郎賞を受賞されました。

お祝い申し上げます。

森のささやきが 聞こえますか

倉本聰の仕事と点描画展

2019年9月9日[月]-10月20日[日]



左から和氣靖九州朝日放送代表取締役社長、倉本聰さん、北橋市長、今川館長

展示リニューアルへ向けた休館期間の館外企画として「森のささやきが聞こえますか 倉本聰の仕事と点描画展」を開催しています。会場は、文学館からほど近い北九州市立美術館分館。九州初開催の展覧会です。

倉本さんは、北海道富良野を拠点にテレビドラマ「北の国から」「風のガーデン」など数多くの名作を世に送り続ける脚本家です。

本展では、倉本さんが仕事のかたわら十数年にわたり描き続ける樹の点描画と、倉本さんのこれまでの仕事を展示します。点描画には、倉本さんが樹一本一本にドラマを見出し、樹がささやく心のうちを言葉にした文章が書き添えられています。

倉本さんの仕事を紹介するフロアには、「北の国から」で実際に使用された「石の家」の撮影セットを展示。主人公・黒板五郎のジャンパーと帽子を身に着けて記念写真を撮ることが出来ます。

現在テレビ朝日系列で放送中のテレビドラマ「やすらぎの刻〜道」と前作「やすらぎの郷」の関連資料は、多くが北九州会場初公開です。

ぜひ、会場へお越しください。

主催 倉本聰の仕事と点描画展実行委員会
(北九州市立文学館、北九州市立美術館、九州朝日放送)

企画制作 = MIMOsaele

倉本聰ギャラリートーク

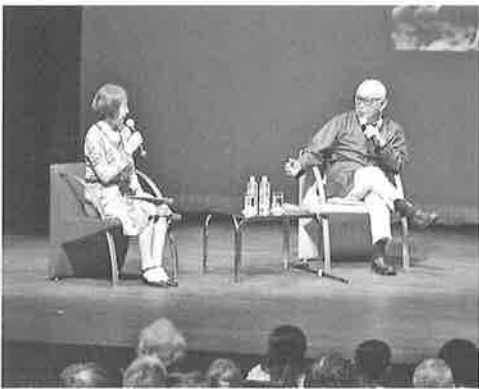
令和元年9月9日

北九州芸術劇場中劇場
展覧会の開会を記念し、倉本さんご自身によるギャラリートークを開催しました。

絵を描き始めたのは、舞台演出のための絵コンテからといいます。デッサンの濃淡をペンの太さで表現してみたら、という発想が点描画につながりました。道具は普段原稿を書くのに使うものと一緒、カラーペンも使用しますが、やはり白黒が面白いとおっしゃいます。

点の集積で画を表現するのには、長年携わられるテレビの画素をイメージされるそう。一作品にだいたい8〜10万個の点描をうたれます。

樹と対話すると、次第にその履歴が浮かんでくるそうです。それぞれが背



右：倉本聰さん、
左：奥田アナウンサー



負う履歴は人間にも通じますが、樹は人間のように年輪による「シミ」を隠さないそうです。

耳をすますと樹が水を吸い上げる音が聞こえることや、白樺の樹液の味わい、富良野に居を移されて次第に耳が冴え、動物の感性が再生したことなど、自然との共生のすてきなエピソードもふんだんにお話しいただきました。

聞き手 奥田智子アナウンサー

(九州朝日放送)

記念上映

小倉昭和館創業80周年 anniversary
Monty 温故知新〜第一弾

9月7日〜9月13日

「ブルークリスマス」(1978年 東宝)

脚本・倉本聰、出演・勝野洋、竹下景子、

仲代達矢、田中邦衛

「冬の華」(1978年 東映)

脚本・倉本聰、出演・高倉健、池上季実子

第26回瀬戸内文学館連絡協議会総会

令和元年6月28日

瀬戸内文学館連絡協議会は、概ね瀬戸内海に面する地域に所在する文学館が、会員相互の連絡・提携を図り、地域文化の向上に資することを目的に、平成6年に発足しました。北九州市立文学館は、平成19年度に加盟し、現在、15館で構成されています。

本年度と来年度の2年間は、当館が会長館を務めることになっています。6月の総会では、各館からの提案議題に対する意見・質疑や企画展等の情報交換などが活発に行われました。

令和元年度上半期

「偲ぶ会」の紹介

・第3回みずかみかずよ誕生祭

4月5日 八幡図書館（八幡東区）

・第37回岩下俊作忌

4月14日 高炉台公園・岩下俊作文

学碑前（八幡東区）

・劉寒吉碑前の集い

4月20日 文学館前・劉寒吉文学碑

前（小倉北区）

・宗左近生誕100年記念イベント

「宗左近」あなたにあいたくて」

※今年度の宗左近忌を兼ねて開催

5月18日 響ホール（八幡東区）

・第57回森鷗外を偲ぶ会

6月19日 紫川沿い・森鷗外文学碑

前（小倉北区）

・第38回林芙美子忌

6月23日 小森江西市民センター

（門司区）

【お悔やみ】

・田辺聖子さん（作家） 令和元年6

月6日逝去、91歳。杉田久女の自

筆資料ご寄贈のほか、企画展「筑

前のおかみさん東路をゆくー田辺

聖子「姥ざかり花の旅笠」と小田

宅子『東路日記』―、特別企画展

「花衣俳人杉田久女」への自筆原稿

のご出展などご協力を賜りました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

文学館は展示改修のため一時休館中

文学館は、平成18年の開館以来、初めての大規模リニューアルを行います。

これまで常設展では、年表形式で数多くの作家などを展示していましたが、改修後は、森鷗外、杉田久女・橋

本多佳子、火野葦平、林芙美子、宗左近のコーナーを設け、短歌・俳句・詩・

小説などのジャンル別に整理した展示も行います。また、若い世代にも人気

が高い、平成以降の現代作家を新たに

加え、体験型の展示や多言語対応、さらに障害のある方にも配慮した改修を行います。

リニューアルオープンは、来年3月下旬を予定しています。休館中のイベントなどの情報は、ホームページやSNSなどでお知らせします。

リニューアルによって、若い方をはじめ、多くの方に、何度でも足を運んでいただけるような文学館を目指しています。どうぞ楽しみにお待ちください。

■寄贈者・提供者

青森県近代文学館、朝日新聞出版、穴

生文芸、一般社団法人岬の文教保存

会、岩野伸子、上野一子、植村隆雄、

NHKエデュケーション、大石聡美、

大阪俳句史研究会、岡山シテイミュー

ジアム、小田勝彦、尾道市文化協会、

神奈川近代文学館、画文集「遠賀川ふ

るさと散歩」の会、鎌倉文学館、川原

健太郎、川原洋子、九州文化協会、吉

良周一、吉良タツエ、近畿大学産業理

工学部、群馬県立土屋文明記念文学館、

現代短歌文庫、公益財団法人北海道立

文学館、公益財団法人三鷹市スポーツ

と文化財団、公益財団法人いわき市教

育文化事業団、光草書道会、向野利彦、

後藤みな子、五味淵典嗣、西城燐子、

さいたま文学館、坂井ひろ子、佐々木

博子、一般社団法人高山市文化協会、

新宿区立漱石山房記念館、杉田重男、

星雲短歌会、節のふるさと文化づくり

協議会、仙台文学館、台東区立一葉記

念館、たかとう匡子、高橋睦郎、竹下

文子、田代信也、鶴岡市立藤沢周平記

念館、TOTOMミュージアム、徳島県

立文学書道館、特定非営利活動法人伝

統白薩摩研究会、鳥越碧、中島晶子、

長田孜、長塚節研究会、中原中也記念

館、西田孝広、西川啓美、西日本文化

協会、日本近代文学館、日本現代詩歌

文学館、日本児童図書出版協会、沼津

市芹沢光治良記念館、野澤伸平、野田

■提供雑誌

館、原口格、姫路文学館、姫路文章表
現研究会、福岡市立文学館、福澤徹三、
藤尾裕宣、藤野千夜、ふらんす堂、文
京区立森鷗外記念館、本阿弥書店、牧
村洋子、又吉栄喜、松尾スズキ、松本
清張記念館、遷標、水井万里子、水木
洋子市民サポーターの会、三鷹市山本
有三記念館、宮崎亀、森鷗外記念会、
森鷗外記念館、森鷗外記念會、柳生じゅ
ん子、山口公和、有限会社海鳥社、六
花出版、渡辺玄英

青嶺、馬酔木、花鶏、あん、いのちの籠
色鳥、海、沖、海峽派、季節風、北九
州国文、九州俳句、九州文学、九大日文、
月刊俳句界、玄海、こどもの本、自鳴
鐘、SUGO、青穂、せせらぎ、船団、川
柳くろがね、川柳むらさき、草原、空
タルタ、小さい旗、卓上作法、天籟通
信、投稿俳句界、新墾、虹野、浜木綿、
ひびき、ふよう、ぼち袋、村、八雁

2019年10月1日発行 北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
<http://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

■開館時間

9:30~18:00 (入館は17:30まで)

■休館日

毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)
年末年始

※9月2日~3月下旬まで休館中